

第百六十五話 自らの非を認めたことは評価できる！

南方石油関連書籍を読んでいて、阿波丸事件を知った。同事件は、1945（S20）年4月1日シンガポールから日本に向けて航行中であった貨客船阿波丸が、米海軍の潜水艦の雷撃により撃沈され、2000人以上の乗船者の殆どが死亡した事件である。阿波丸は日米間の協定で安全航行を保障されていたにも拘らずに撃沈されたのである。

1 赤紙ならぬ白紙で徴用された石油関係者数

赤紙は云わずと知れた召集令状であるが、「白紙」と言われたのは徴用令状である。上述の書籍によれば、南方の石油施設運営のために動員（白紙徴用）された徴員数は、陸軍約4900名、海軍約7000名に及んでいるという。（閑話休題）

2 阿波丸事件の経過概要

米及び連合軍の要請を受けた赤十字の仲介により、日米双方の捕虜・拘束民間人への救援物資を交換する協定が締結された。当時米国は無制限潜水艦戦を行っており、日本側は輸送に使用する船舶の安全航行の保障を求めた。米国は安全航行を確約した。

米国の救援物資2000トン余りはナホトカで積み込まれ、日本に持ち帰られ、内800トン(or1600トン)は南方の捕虜収容所向けであり、その輸送担当に選ばれたのが数少ない優秀貨客船であった阿波丸(11249t, 16kt)であった。阿波丸は船体を白一色に塗装、両舷及び煙突に白十字のマーク、夜間照明可能、武装取り外し、病院船に準ずる「緑十字船」とした。同船は、1945(S20)年2月17日門司を出発し、積み荷を所定の港に卸下し、シンガポールから日本に帰ることとなった。阿波丸は日本に帰る最後のチャンスであり乗船希望者が殺到した。乗客は商船員、非戦闘員、軍人・軍属等2000余名であった。他に戦略物資を2500トン積載していた。米軍は暗号解読でその状況を承知していた。3月28日にシンガポールを出発、4月1日、これから台湾海峡に入るとの連絡を最後に消息が途絶えた。この時、米17機動部隊所属の潜水艦クィーンフィッシュによって撃沈させられていた。救助者は僅かに一名のみであった。

日本政府は4月12日スイス政府経由で承知し、責任ある説明を求め、抗議すると共に損害賠償を求めた。7月5日、米国は阿波丸撃沈の責任を認め、賠償問題は戦争終結まで延期と提案した。

3 賠償問題の行方

戦後、日本側の賠償請求に対し、マッカーサーが強く拒否したので、賠償請求権を放棄する代わりに有料食糧援助増額案を示され、日本政府もこれに同意し、1949(S25)年4月14日「阿波丸協定」が締結された。

4 攻撃の理由等

潜水艦隊司令官は、阿波丸が軍事物資を搭載しており、正当な攻撃目標であると攻撃許可をミニッツに要請している。同潜水艦への攻撃禁止命令の確認が遅れた。ミニッツの返答なきを黙認と受け取ったとの説もある。位置情報伝達も間に合わなかったとも云われる。艦長は軍法会議にかけられた。攻撃目標を目視確認もせずに攻撃するのは言語道断だ。潜水艦による攻撃は人為的なミスであると云える。

5 慰霊碑等

芝の増上寺境内に「阿波丸事件殉職者之碑」がある。

日本政府は、死亡者一人当たり7万円の見舞金を遺族に支給(1950年)

沈没阿波丸から遺骨368柱、遺品1683点が、中国から日本に返還された。尚、積載が噂された金塊等は発見されていない。



- * 絶対安全航行保障と軍事・戦略物資積載、米軍の不手際・ミス、某国等と違うのは自らの非を米国が認めたことだろう。